

北佐久におけるりんご栽培

(要 約)

吉 村 友 子

北佐久の地形は北東に浅間山、西南に霧科山がそびえ、西には霧科山の裾が北にのびその先端に柳牧ヶ原、八重原の台地がある。これらの山地及び台地に囲まれて盆地状の低地（佐久平）が岩村田町を中心に小海線沿に展開している。気候は夏期において兩重少く、概して寡雨であり日照が比較的長くしかも気温は冷涼で温度の較差大きい。土壌は千曲川流域に肥沃土がある。交通は信越線が中央を東西にはしり、又中仙道もそれに沿って存在し東京とを結び付けている。以上の様な自然的条件、交通の便のよさはりんご栽培に適しかつ、農業恐慌の対策としてりんご栽培が奨励される等により北佐久のりんご栽培がおこなわれるようになった。大正3年はじめて三岡村に5反歩程の植付が行われた。のち順次増加の傾向をたどるが、戦時中は作付統制により一時減少し、戦後再び回復し特にここ2、3年間の増加には着しいものがある。栽培状況をみると、小諸市三岡村と立科村五輪久保が中心となり、小諸市のみで北佐久の約4割がここに集中している。栽培品種は目光、紅玉等の中性、晚生品種が主で、スターキング、ゴールドデン、デリシヤス等は少い。主な販路は東京市場で、トラックにより中仙道を通って出荷される。長野県全体から見ると北佐久のりんご栽培の占める割合は小さく、北信の大生産地の周辺にありまだまだ後進地域である。これは機械化、共同化の面をみても北信の大生産地とはかなりの差がある。又他の農作物と比較してもりんご栽培面積は少く麦類、桑園面積の方が大である。北佐久におけるりんご園は主として桑園より転換がなされたのであるが、昭和初期の養蚕業の不振とその対応策としてりんご栽培の奨励、又戦後の養蚕業の不況はりんご園への転換に拍車をかけた。戦後の桑園面積とりんご栽培面積の統計をみれば、りんご栽培面積の増加に対応するかのよう桑園面積の停滞もしくは減少を示しているのをみても明らかである。